

限られた授業時間を

生かす指導の工夫

大阪教育大学名誉教授

中西 一弘
なかにし かずひろ



時間削減の一年間、どのように...

新教科書を使つての授業が、二年目に入る。ということとは、すでに一度、授業時数の激減がもたらす困難さを痛感された方も多いことである。

今まで、国語学習の主体をなしてきた「読む」「学習は年間を通して、ごくたまにしかない。それも、とびとびに、といった印象を受けるほど稀である。さらに、問題になるのは、一つの教材にかける時間数が、従来もの比べて、少ないという事実である。新指導要領の決まりにしたがつて編集されているからには、そのような時間数の削減は遵守しなければならない。それは理解できるにしても、具体的にどう対応すればいいのか。実践にあつて解決困難な問題に突き当たることが多い。

めているのか、という疑問がつきまとう。それ以前にも自分が読み取ったものを、一度、自分の言葉で表現してみなくては、何をどのように読み取ったかは、明確にはならない。簡単な書きつける作業がなくては、実は「読むこと」の学力さえ保障されない。この事実の認識が大切である。「話し、聞く」「とも」「書くこと」はいる。

このような考え方で...
このような認識があれば、いつの授業にも、プリント類を用意して、「くくくわすかでも記述させていくこと」になる。毎時間、一、二行単位の、短い文・文章でいい。それらの記述活動が数回あれば、一時間の授業でも、もう相当の記録量(書いたものが残ること)になる。何回かの授業後には、盛りだくさんの資料に成長している。それだけの資料があれば、後は、整理して書くだけである。構想も楽しく、短時間でできる。第一に、「何を書くのか」という嘆きはない。「これを選ぼうか」という期待もてる。うれしい嘆きがあるだけである。第二に、「記録した順に」「という構成が基本として決まっている。基本があるから、意図的効果的な変形を工夫してみようか、との余裕も生まれる。第三に、記述の言葉も、記録した文・文章を写していけばいい部分が大半となり、頭

とはいえ、二年目の先生方は、昨年の経験を生かして、なんとが工夫されてきたことである。そのさまざまに試みの一つに、私案も加えていただければ幸いである。

私の考えは、前号と前々号で繰り返し述べてきたとおりである。つまり、国語科の「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の各領域の学習がどの授業にも有機的に結び合わされていることにある。時間数の激減があればあるほど、能率を考えた指導計画が必要である。指導計画を立てるに際しては、この有機的な総合化を基準にしていく。(指導書に一例としている、領域ごとの時間配当でなく、単元全体の時間配当を重視する。)

ということとは、「書くこと」の時間も、いわゆる「作文」(書くこと)を主とした(の)単元(教材)のみで充当するのではなく、「読むこと」「話すこと・聞くこと」の単元(教材)においても、計算に入れていくのである。逆に、「書くこと」の時間にも、「読むこと」を入れていく。同じ日本語を対象に、その理解と表現を目ざす学習なのであるから、「読むこと」と切り離された「書くこと」は、非能率であるだけでなく、本当の意味で書く実力がついていくのか、誠に不安である。このことは、「読むこと」「話すこと」についても当てはまる。「書くこと」「の知恵にまで届かない」「読むこと」の学習は、これも本当に読

脳を苦しめる作業は極度に少ない。すると、記録と記録とを結び文の表現を工夫するだけだ。そのわずかな部分に集中すればいいので、かえって自由に考えることができる。それらの性質から、第四として、負担感を持たずに、短い時間内に、やや長い作文ができあがる。作文単元(「書くこと」)の授業で、長い時間数をかけた後に、やっとできあがる作文と比べて、分量においては、断然長大なものに仕上がることが間違いない。質においても優れたものになる。

要は、毎時間、残る形での記述(書くこと)をさせていくという配慮さえあればいい。作文だと思わないうちに作文ができあがる経験を見童に与えたい。全ての時間で鉛筆の動く学習こそ、確実に「書くこと」の力をつけていく近道である。表現好きな人間に育てていく。

学習の課題を最初に掲げて
五年上「海にねむる未来」

この説明文教材でのねらいを一つにしたい。つまり「文章の内容を的確におさえながら、筆者の訴えようとしたこと(要旨)をとらえる。」という一つ。

ねらいを焦点化すると、学習課題は明白になる。明白になると、次の問題としてそのねらい(課題)を、どの

ようにして、達成すればいいのか、という手順・着眼点が浮上してくる。

その有力な着眼点は、タイトルにある。それも、「海」「+」「ねむる」「+」「未来」の三つに分けて考え、それぞれが、第二段落でどのように具体化されているか、を読み取る。つまり、「予想」を持って読んでいけるようにする。続いて、最後の段落に移り、「予想」が外れていないか、確実な観点が、と検証する。このように「読み」の姿勢ができるよう、一回の読みでも教材文全体のあらまし（構成）をつかむことができる。反復表現に注目すれば、事例に分けることも、事例ごとの「要旨」も、ほぼ見当がつく。「一、二回も読み返せば、ねらいは達成できる。この手順と着眼点が決め手となる。」

五年上「読書の楽しさを伝え合おう」

「ここには、「プラム・クリークの土手で」と「宇宙をみたよ」が、読む教材としてある。二つを六時間で読むのは無理が伴う。全十五時間のうち、十二時間ほどをもちろ。読みの学習をしながら、読書感想文のメモや発表メモを書きためておく。残りの三時間を活用して、二作品でのメモを生かして、自分たちの読書生活を語り合い、これからの読書計画を書き、発表する。」

ナーにも、「やまなし」を使って、相手の興味を引く展示の内容・形式・方法などを工夫させる。この作業に第四単元の学習を焦点化しておき、成就感が達成できるように努める。

その快感を振り所にして、残ったわずかな時間で、他の作品、他の作家にも向かわせる。それらは、仕事の端緒を授けることをねらいにする。手がかり（方法）さえ与えておけば、成功した経験に支えられて、夏休みなどの自由時間を利用して、ねらいどおりの作業を主体的に行ってくれるであろう。このように注文しなくても完成してくれるようにならないければ、単元のねらいは真に達成されたとは言えないのだから。

以上、高学年を取り上げた。低・中学年では、同じ観点さえ持てば、時間の融通は、もっと容易である。書き込みや書き抜きさえあれば、表現は十二分にできる。

六年上「やまなし」

文学教材では、読み手の自由を認め、好きなところを探し、その理由を書いて、発表しよう、という課題が最上か。この課題なら、素直で活発な授業が展開する。しかし、場面を二つだけでなく、もう少し細分して選ばせたい。プリントには、好きな部分の視写と選んだ理由に、発表を聞いてほしいと思った友達の名を書き加える空欄も設けておく。指導事項としては、「作品の情景を、叙述に即して想像しながら読む。」「と」「書かれている内容について、自分の考えを持ちながら読む。」「の二つに限る。」「やまなし」が好きにならなくては、「宮沢賢治の他の作品や、興味のある作家の作品を読む。」「というねらいへは発展しにくい。自分の中にしっかりと土台（興味と方法）を持つ必要がある。それさえできれば、自然と他の作品にも広がっていく。」

そこで、自分の好みを発見させることに集中させたい。それが、結果として「興味」を増し、他の作家の作品を読むことにつながる。そのため、読む時間の七時間を全部、「やまなし」に費やす。そのついで、「作家と作品に出会おう。」「作家と作品」展示コーナーを作る。という活動からも、二、四時間ほどまらう。「作品と出会おう」(この場合は「やまなし」と出会おう)に限る。展示コー

